るであらう。佛教流傳の頭初にあたつてはその教理を傳達するために黄老家の語彙を多分に借用したといはれてゐるがそれと同様に造形藝術においても多分に在來の形式――しかもその宗教的な造型形式を――を採用した。採用されたものは單なる言葉であり、形式であるといひ去るわけにはゆかない。この言葉と形式によつて在來のイデオロギーがこの新來の宗教に安固な素地を提供したのである。これによつて佛陀の教へは江の南北を風靡し、佛教造形藝術はまた藝術界の主流となつたのである。こゝに至ればもはや印度・西域の佛教ではなく、印度・西域の造形藝術でもない、六朝人の佛教であり、六朝人の造形藝術である。こゝに支那宗教藝術の一貫した發展が見出される筈である。

*私は六朝藝術を漢代藝術に對立した一定の形式として見、その場合主として五百年代の製作を念頭において論じた。これはむしろ普通の見解にしたがつたまでゝある。六朝藝術をこまかい變遷のうちに見るならばもつと複雜した事象に遭遇し、もつと詳細な說明が必要となるであらう。本稿では根本の大筋を示したまでゝある。

茶商と後宮 〔乾興元年夏四月〕壬寅。以光祿寺丞尉氏。馬季良家本茶商。劉美女壻也。於是。召試館職。太后〔眞宗皇后劉氏〕遣內侍賜食。促令早了、主試者分爲作之。此據江休復雜記主試者學士晏殊也。(長編卷九十八)宋代に於ては館職に任ぜられるといふ事は官吏としての將來の立身出世を約束されたも同樣甚だ名譽とすべき事であつた。こゝに見ゆる馬季良といふ者は非凡なる才を有する者でもないが、只單に劉太后の兄劉美の女婿であるといふ關係で館職の試驗には太后の命で主試者たる晏殊が代つて答案を作らされて居る。この馬季良がもと茶商であつたといふ事は重要なる事實を暗示するものであつて唐代より宋代にかけて發展した茶商が、その財の蓄積と共に後宮と關係を結び、遂には直接間接に政治と結びつかんとする傾向のあつた事を示す一例である。かやうな事は、宋代に於て特に著しい現象であつて、商人の社會的地位がいかなるものであつたかを推測せしめるものである。(佐伯)